平成18年度　日本赤十字学園「赤十字看護・介護に関する研究」助成事業報告書

「国際活動にかかわる赤十字看護職の九州版キャリア開発ラダーの構築」

氏名　下山 節子

所属　日本赤十字九州国際看護大学

提出日　2007年5月31日

Ⅰ はじめに

日本赤十字社は、1877(明治 10)年、非西洋国初の人道援助機関として創設された。そして早くも、1890(明治23)年には、体系的な看護師養成を始めている。

それから1世紀、2007(平成19)年には、5看護大学(内 博士課程1、修士課程4大学院)ほか、全国に 92病院を擁するほか、わが国全土を網羅する、安全な血液補給を担うなど、世界の赤十字・赤新月社でも、最大級の機能を持っているといえる。その日本赤十字社が、重点を置く活動のひとつは、歴史的経緯もあるが、国内外の救援活動に参画しうる「赤十字看護師」の育成であろう。

近年、健康危機という概念は、国民の生命、健康の安全のみならず、安定した社会生活を脅かす事態としてクローズアップされており、わが国では厚生労働省の方針などを基に地域における管理体制整備も進められてきている。しかし、その中での看護職の役割は明確とはいえないし、また、各赤十字施設では、多様な人材育成が行われているが、施設間、特に大学と近隣医療施設間の連携にかんしては、必ずしも、密接で効果的な関係にあるとはいえない。

ここに、赤十字の理念を基に、国境を越え、多様な健康の危機の救援に貢献しうる看護専門家育成について、大学における教育期間から医療施設における卒後教育を鳥瞰した、長期的かつ継続的で具体的な計画が必要との思いを新たにし、以下の研究を企画した。

Ⅱ 目的

本研究は、日本赤十字九州国際看護大学(以下、本学と略す)と、日本赤十字社の国際医療救援拠点指定病院として長い経験をもつ熊本赤十字病院、および本学の主たる実習施設であり、また、本学開設にあわせて積極的に国際活動を進めている福岡赤十字病院

の両施設の救援活動および卒後人材育成を連携し、「大学教育から就業後の継続教育としての国際救援活動キャリア開発ラダー」を策定試行し、改善のための課題を明らかにすることである。

なお、本研究は、平成 18 年度日本赤十字学園本部による「国際救援・開発協力事業に携わる人材育成検討委員会」(以下人材育成検討委員会と略す)の主題、および同委員会の 19 年度継続事案「国際活動における赤十字看護師キャリア開発ラダー」とも関連しているが、特に、九州ブロック内の「国際活動における看護師キャリア開発ラダー」としての具体的活用に焦点をおいている。

また、平成 16 年、日本赤十字学園の「赤十字看護大学・短大における赤十字教育に関する検討会」では、赤十字関連科目(「赤十字概論に総称されるもの」「災害看護論に総称されるもの」「国際活動に総称されるもの」「日本赤十字社救急法・家庭看護法・水上安全法・幼児安全法」など)中、「国際活動に総称されるもの」として、赤十字国際活動や国際保健、国際看護の基礎教育の重要性が再確認されており、そのためのカリキュラム改正検討会で、本学から参加した下山が提案した「国際活動を主にした赤十字看護教育のための大学一病院キャリア開発ラダー」構築の過程の検討である。

III 関連施設における国際活動人材育成の現状

1. 日本赤十字九州国際看護大学の教育

本邦唯一、「国際」を標榜した看護単科大学として、開学時より、きわめてユニークな教育が行われているといえる。

全カリキュラム中、赤十字/国際関係は必須7単位、選択 2 単位で、特徴は赤十字概論や災害看護論に総称されるもの以外の国際活動と総称する中に、国際看護学、国際開発

論、国際保健学の3必須単位と日本赤十字社救急法・家庭看護法の1必須単位を置いていること、および3年次の国際看護IIでは途上国での海外研修(選択2単位)が可能なことである。本海外研修は、訪問国の赤十字活動の見学、研修を手始めに、国際機関(WHO、UNICEFなど)、わが国のODA(政府機関、JICA)の解説や現地研修ほか、現地の各レベルの医療施設の見学と看護教育の実態見学、さらに現地の人々との交流であり、これまでの成果は、毎年の報告書に詳しい。

その他本部科学省、UNESCOなどの奨励金による学生主体の国際交流のほか、開学年からの年次国際シンポジウム、さらに毎年数回以上のランチョンミーティングや、JICAの研修受け入れによる外国人専門家との交流など、常時とも云える国際教育が行われている。

しかし、準備、実践および報告書作成、関係者への連絡などを含め、これらの教育を継続するため、全学的な努力は行われているものの、特定教員に加重がかかっている事実はある。

2. 熊本赤十字病院(拠点病院)の卒後教育

熊本赤十字病院は、日本赤十字社の国際医療救援拠点指定病院として人材育成に力を注いできた。日本赤十字社が平成11年度より開始した「救護員としての研修」と平行しながら、拠点病院としての国際活動関連研修会の企画も職種を超えて実施している。具体的には、希望職員全員を対象に英語勉強会(一般英会話)や月1回の救護活動勉強会開催している。また、補助金による研修会としてはPCM、ERU、集中英語研修会を開催し、BTC、H.E.L.P.、熱帯医学関連研修、戦傷外科セミナー等への派遣をしている。

しかしながら、看護師を対象とした国際救援や開発協力の視野に立った卒後教育プログラムはない。国際救援活動を希望する看護師に対しては、まずは臨床看護実践能力を高

め国内救護訓練参加を第一優先として、卒後教育が実施されている。

3. 福岡赤十字病院(拠点病院以外)の卒後教育

福岡赤十字病院は、福岡県下赤十字医療施設の基幹病院としてまた看護師養成機関として看護教育の役割を担ってきた。特に「救護員としての研修」は、福岡県下の医療施設に公開し救護員育成事業を行ってきた。また、卒後教育の一環としての赤十字看護師キャリア開発ラダーは、全国赤十字施設の中でもいち早く導入し卒後看護教育を充実させている。

しかしながら、国際救援や開発協力事業に特化した卒後教育プログラムの企画はなく、個々人の主体性に課せられている状況であった。そこで、本学の開学を機に 2005（平成17）年より国際に特化した卒後教育プログラム作成に取り掛かかり、2006（平成18）年度より「国際救援・開発協力活動派遣教育」を開始した。

特徴としては、実際に海外救援に出た看護師たちが企画しており、研修対象は「一人で看護実践ができるレベル」以上で海外派遣準備段階の看護師で、支部職員をふくめた他職種にも公開している。国際活動に関心をもつ本学卒業生は、2006（平成18）年度のこの「国際救援・開発協力活動派遣」教育プログラムの研修に参加する機会を得ている。本学はこのプログラムを支援し、講師を派遣している。

IV. 日本赤十字社の海外救援の実態

1. 海外派遣の実情

1992—2001 年の間の日本赤十字社の海外救援派遣数は、41 カ国、延べ 555 名（医師、看護師、助産師、薬剤師、検査技師、事務・管理要員）で、年平均は 55.5 名である。

最近では、例えば、2002(平成14)年には、21カ国・地域に延べ56名、2003(平成15)年には19カ国・地域延べ49名で、概ね、それ以前と同様の趨勢にあった。しかしながら、インド洋津波災害が発生した2004(平成16)年には、支援総数40カ国以上中、11カ国・地域に108名派遣という、それまでの年平均の倍近い派遣がなされている。これらの派遣数にしめる看護職の割合は平均約20%であった。

(日本赤十字社HP http://www.jrc.or.jp/active/kokusai/worker/list.html)

2. 海外派遣要員登録の実情

海外救援のための基礎研修(BTC、ERU)を終了した赤十字職員数は、2006(平成18)年9月1日現在296名で、内訳は、医師57、看護師114、事務職90、技師等35である。(平成18年度日本赤十字社学園本部主催「第2回 国際救援・開発協力事業に携わる人材育成検討委員会」資料No.2より)

BTC及びERU基礎研修会修了者の赤十字看護師登録要員実態を 表1 に示す。登録看護師数(114名)は、全赤十字看護師数30,025名(2006年10月現在。赤十字のしくみと活動平成18年度改訂版)のわずか0.37%に過ぎず、拠点病院に於いてさえその割合は1.1%過ぎない。

さらに 表2 に示すように、登録看護師114名のうち、実際に派遣された者81名(登録者の71.1%)で、基礎研修修了にも関わらず、派遣されたことがないものが33名(28.9%)にも上る。

また、拠点病院とそれ以外の施設では、当然ながら、前者からの派遣数が圧倒的に多いほか、同一人が5回以上と頻繁に派遣されている例も見られる。

V 結果・考察

1. 関連施設における国際活動人材育成の現状と問題

1) 日本赤十字九州国際看護大学の国際教育の現状と問題

本学での 4 年間の教育期間中、「国際活動」に強い興味、関心を示す学生の多くは、例年 3 年次の「国際看護学 II」海外研修に参加している。これらの学生は、将来の国際活動を比較的具体性を持って想定しており、卒業時点では、全体の 20%近くを占めるが、中には自発的なものを含め、在学中に、観光目的ではなく、NGO などを訪問するなど、数回の途上国を経験するものもいる。

これらの学生は、総じて英語への偏見がなく、プレゼンテーションやレポート作成能力も高く、大学行事での企画運営にも優れている傾向にある。しかしながら、これらの卒業生が在学時代に受けた教育や経験は、就職先では、十分認識されていないと思われる。

大学側の問題としては、今後、「看護」教育に遜色なく、「国際」にも重点を置いて教育を行うには両分野に習熟した教員をそろえるという、至難の業を必要とすること、さらに、一般的にも、教職員の国際感覚、能力、経験を向上させる必要がある。すなわち、「看護」と「国際」および「赤十字」を一体化した intensive tutorial の確立には、人的経済的資源が必須である。

2) 熊本赤十字病院の現状と問題

熊本赤十字病院は、拠点病院の特徴から全職員を対象とした国際活動関連の研修会が活発に実施されている。しかし、国際救援、開発協力活動に携わる看護師に求められる地域保健の実際やプライマリーヘルスケアの概念を学ぶ教育プログラムはなく、現在は、他拠点病院との連携でその不足を補っている状況である。

今後は、本学と連携して効果的な教育プログラムを企画することで、より充実した国際教育プログラムが策定できる可能性がある。

3) 福岡赤十字病院の現状と問題

福岡赤十字病院では、赤十字国際活動の使命を果たすため看護師に対し海外派遣を推奨し、そのための独自の教育プログラムを展開してきている。しかし、拠点病院でないため、補助金等の経済的支援はなく、国際教育、人材育成には限界があることは否めない。また、国際活動にかかわる職員教育や海外派遣に伴う欠員補充経費は医療施設負担であることから、一般的に、経営状態の厳しい医療施設が海外派遣事業に参画するのは難しい現状もある。

したがって、拠点病院外施設である福岡赤十字病院は、本学や拠点病院である熊本赤十字病院とも連携し、例えば九州ブロック全域の赤十字医療施設の活動として国際救援に携わる看護師の育成に取り組むことで、問題解決を図る可能性はあろう。

過去3年間、多数の本学卒業生が就業していることから、これらの人材が能力を発揮できるような体制を求めたい。

2. 日本赤十字社の海外救援の現状と問題

BTC 及び ERU 基礎研修会修了者の赤十字看護師登録要員実態と海外派遣要員の実情から、以下のことが明らかになった。

① 海外派遣要員として登録している看護師の絶対数が少ない

② 海外派遣要員として登録しても、派遣の機会は少なく、特に、拠点病院看護師以外の派遣機会はほとんどない。

③ 拠点病院では同一看護師の頻繁派遣が生じており人材育成の効果性に問題がある。

これらの問題は、派遣に対する病院幹部、看護管理者の認識や職員への啓発のあり方などが影響していることが推察される。また、国際救援に派遣した職員の帰国後の処遇が

重要である。例えば、海外派遣経験を評価し施設内認定の「国際救援認定看護師」として公にする、役職を与えるなど地位を確保する、また帰国後の勤務配置は本人との十分な話し合いのもとで決定する、フォローアップ研修や次のステップアップのための研修機会を積極的に与える、海外派遣の経験を発表する機会をつくる、そのための勤務表の調整を図るなどがあり、救援派遣者が帰国後、スムーズに職場復帰できる体制が必要である。

3.「国際活動に携わる赤十字看護職の九州版キャリア開発ラダー」の実際と課題

1) 国際救援・開発事業に携わる看護師の看護実践能力の枠組み

平成 16 年「赤十字看護大学・短大における赤十字教育に関する検討会」で、下山は、国際活動を主にした赤十字看護師を教育するための「大学と医療施設の連携したキャリア開発ラダー」を提案した。

それを継承し、具体的に看護大学における教育期間から、卒後の医療施設における継続教育とを連携させるために、2006 年 5 月「日本赤十字九州国際看護大学・熊本赤十字病院・福岡赤十字病院合同の国際活動に携わる赤十字看護職のキャリア開発ラダー――基礎教育・継続教育・卒後教育との連携」案(表 3)を作成した。

その趣旨は、

① 赤十字国際活動に関心を持つ看護師にキャリア形成の方向性がみえる

② 赤十字国際活動に関心を抱く人材を発掘する機会となる

③ 国際保健活動に対応できる能力をもった看護師育成プログラム

④ 国際に関する看護専門家の育成

であったが、 本案は看護実践能力の具体的指標や枠組み等の構築までは至らなかった。

本研究はこれらの経緯を含め、表4に示すように本社看護部が、2004(平成16)年より提唱してきた「赤十字看護師看護実践能力の指標」の枠組みを参考に、国際救援・開発事業に携わる看護師の看護実践能力指標の枠組みを作成した。

表5にその枠組みを示したが、国際活動に必要される実践能力評価項目として、① 看護実践能力 ② マネジメント ③ コミュニケーション ④ 研究 ⑤ 国際赤十字の5項目を挙げ、「内容」に国際活動に特化した具体的事項を明示した。

国際活動の実践能力レベルとして以下の5段階を設定した。

国際Ⅰ段階:初心者・学生(ビギナー)レベル、Ⅱ段階:新人(コンピタント)レベル、Ⅲ段階:一人前(アドバンスト)レベル、Ⅳ段階:中堅(エキスパート)のレベル、Ⅴ段階:コーディネーターのレベルである。

国際Ⅰ段階では、本学の充実した国際教育を踏まえ、学生をビギナーと位置づけ実情に合う形のラダー構築を想定した。Ⅰ・Ⅱレベルは、海外救援派遣に必要な基礎的能力を身につける段階で、Ⅲ以降が海外派遣レベルである。

表6は、これらの枠組みの基にした九州版「国際活動に携わる赤十字看護職のキャリア開発ラダー(案)」である。この表6は、表3、表5を統合して作成した。縦軸を目標、職務、習得内容、研修項目、資格要件、評価方法との分類し、習得内容の中に、前述した国際活動に必要される実践能力評価5項目を含み、それぞれの5段階の国際看護レベルに、主たる能力や研修項目を入れた。

人材育成検討委員会で共通に理解したのは、医師、看護職、事務職、技師・薬剤師いず

れも国際Ⅲレベル以降が海外派遣レベルとすること、Ⅲレベルに到達するまでに必ず、RCM 基礎研修、ERU 基礎研修、BTC 国内研修を受講することを必須としたことである。

この枠組みの妥当性と項目ごとの能力開発の指標は、今後、活用しながら策定、評価する必要がある。本研究で開発した、九州版「国際活動に携わる赤十字看護職のキャリア開発ラダー(案)」は、本社人材育成検討委員会にも提案したが、全国版としての活用の可否は、同委員会で引き続き検討されている。

2) 国際活動に携わる赤十字看護職のキャリア開発ラダー(九州版)の活用と課題

国際活動を目指して赤十字学園の看護大学を終え、海外派遣の希望をもって赤十字病院に就職しても、卒後教育の是非によっては、海外派遣の機会を得ないまま退職したり、他の機関(日本国際協力機構)緊急救援チームやNGO に参加したりすることも起こり得る。例えば、本学卒業生が異なる教育経験の同僚と同様の看護実践能力のための卒後教育を受けるにしても、国際保健・看護研修の経験が正当に評価される体制が必要である。

本研究では、本学卒業生の研修経験を評価した人材育成指標として、「国際活動のキャリアアップを目指す看護師に対する基礎教育別育成マップ(九州版)」 図1 も作成し、「赤十字概論」「国際看護学・海外研修」「国際保健」の履修の有無によるコース選定を行い、これらの科目を既履修者は育成マップに示すように国際ラダー1 段階は終了したと評価される。

また、日本赤十字社には、国際救援・開発協力のための4コース(ERU、ICRC、IFRC、二カ国間協力事業各コース)があるが、学生および看護師にも、これらに接する機会をつくるため、それぞれの特徴を踏まえた「赤十字国際看護活動コース別人材育成マップ」 図 2

を作成した。本マップは、各コースの違いが一目瞭然であり、これを活用すれば、キャリア開発に必要な能力や研修要件を組み込んだラダー構築が可能となる。

V まとめ

本研究は、本学と熊本赤十字病院および福岡赤十字病院と連携し、大学教育から就業後の継続教育としての国際救援活動九州版キャリア開発ラダーを策定した。

本九州版「国際活動に携わる赤十字看護師のキャリア開発ラダー」活用や今後の国際教育人材育成の課題として以下を想定しているが、これらは次ステップの検討に委ねたい。

1) 「看護」と「国際」および「赤十字」を一体化した intensive tutorial を確立するための人的経済的資源の導入
2) 国際活動に携わる看護師に対するキャリア開発のための研修企画と評価システムの構築
3) 国際活動に関心のある看護職員の発掘(平成 19 年度実態調査の予定)
4) 赤十字医療施設間での看護職員の人事交流
5) 本学と病院との連携による研修会の効果的な活用
6) 病院幹部、看護管理者の意識改革

謝辞

本研究にあたりご指導いただきました日本赤十字社看護部浦田喜久子部長、本学喜多悦子学長および日本赤十字社学園本部主催「国際救援・開発協力事業に携わる人材育成検討委員会」の皆様に深く感謝申し上げます。また、ご協力いただきました熊本赤十字病院高島看護部長、福岡赤十字病院江田柳子看護部長に深謝致します。

表1　赤十字看護師登録要員数（BTC、ERU 基礎研修会修了者）

	全病院	拠点病院	拠点病院以外
施設数	417	5	412
看護師数*1 （比率 %）	30,025 （100）	3,134 （10.0）	26,891 （90.0）
登録看護師数*2 （比率 %） （看護師総数に占める比率 %）	114 （100） （0.4）	36 （30.0） （1.1）	78 （70.0） （0.3）

*1：2006（平成18）年10月1日現在

*2：2006（平成18）年9月1日現在

（平成18年度日本赤十字社学園本部主催「第2回　国際救援・開発協力事業に携わる人材育成検討委員会」資料No.2より一部改変）

表2　看護師派遣実績（BTC、ERU 基礎研修会修了者）

2006（平成18）年9月1日現在

		全病院	拠点病院	拠点病院以外
看護師登録者数 （比率 %）		114 (100)	36 (30.0)	78 (70.0)
登録者のうち派遣なし数 （登録総数に占める比率 %）		33 (28.9)	7 (19.4)	26 (33.3)
登録者のうち派遣実数 （登録総数に占める比率 %）		81 (71.1)	29 (80.6)	52 (66.7)
派遣回数	1回	22	5	17
	2回	26	5	21
	3回	7	6	1
	4回	18	3	6
	5回以上	17	10	7

（平成18年度日本赤十字社学園本部主催「第2回　国際救援・開発協力事業に携わる人材育成検討委員会」資料No.2より一部改変）

表3 熊本赤十字病院・福岡赤十字病院・日本赤十字九州国際看護大学合同「国際救援・開発事業に関わる看護師のキャリアアップラダー」－基礎教育・継続教育・卒後教育との連携－ （平成18年5月作成）

	習得要件	1段階（ビギナー）学生	2段階（コンピタント）	3段階（アドバンスト）	4段階（エキスパート）	5段階（コーディネーター）
赤十字・国際看護	知識	国際活動に必要な基礎的知識（導入） ・赤十字概論、国際人道法、国際看護学、災害看護学の基礎知識 ・国際保健学・疫学・国際関係論の基礎知識 ・看護教育の基礎知識 ・看護管理・PCMの基礎知識 ・スフィア・プロジェクトの学習 ・日本赤十字社救急法の基礎知識 ・赤十字の理念と諸原則の理解 ・世界の情勢に興味をもち、国内外の赤十字活動の理解 ・異文化理解の意義	国際活動に必要な基礎的知識（初級） ・世界情勢を赤十字の理念や諸原則に基づいて理解 ・異文化の理解	国際活動に必要な専門的知識（中級） ・国際活動におけるマネジメントの基礎 ・赤十字概論、国際人道法、国際看護学、災害看護学の専門的知識 ・国際保健学・疫学・国際関係論の理解を深める ・看護教育・看護管理の理解を深める ・赤十字看護師に必要な災害救護、復興支援、心のケアの理解 ・国内災害救護活動の体験を看護化し、経験として意味付ける ・PTSDの理解 ・UN、NGO活動内容 ・PCMの評価編の理解 ・異文化の理解 ・英語論文を読む、書く	国際活動に必要な専門的知識（上級） ・国際活動におけるリスクマネジメント ・赤十字概論、国際人道法、国際看護学、災害看護学の専門的知識 ・国際保健学・疫学統計・国際関係論の再学習 ・看護管理・看護教育の再学習 ・赤十字看護師に必要な災害救護、復興支援、心のケアについて救護計画の企画 ・国内外災害救護・復興支援活動について研究的視点から考察する ・国際活動の評価（活動報告書の研究的分析） ・異文化の理解 ・英語論文を読む、書く	国際活動に必要な専門的知識（最上級） ・国際活動におけるマネジメント専門知識 ・組織の成長・発展に繋がるマネジメントができる ・赤十字看護師として、災害救護、復興支援、心のケアについて企画・指導できる ・国際活動の評価（活動報告書の研究的分析） ・赤十字の可能性と課題について提言 ・異文化の理解 ・英語論文を読む、書く
	訓練研修	・海外研修（途上国スタディツアーなど）参加 ・PCM参加（基礎編） ・日本赤十字社救急法救急員養成講習受講 ・日本赤十字社の救護員としての赤十字看護師に対する研修参加 ・語学研修（TOEIC 550 以上）	・日本赤十字社の救護員としての赤十字看護師に対する研修参加 ・語学研修（TOEIC 650 以上）	・PCM研修参加（評価編） ・BTC研修参加 ・ERU研修参加 ・災害時心のケア研修参加 ・救急法のスキルアップ（ボランティア参加など） ・語学研修（TOEIC 750 以上） ・赤十字救急法指導員研修参加	・災害救護訓練指導 ・HELP研修参加 ・UN、NGOとの連携の学習 ・赤十字救急法指導員研修参加	・災害救護訓練指導 ・各種研修における指導 ・HELP研修コーディネイト ・赤十字救急法指導員研修参加
	実践活動	・救急法のスキルアップ（イベントでのパフォーマンス、ボランティア参加など） ・学内防災訓練参加 ・福岡県支部主催災害救護訓練 見学 参加（防災ボランティア・負傷者） ・福岡県・宗像市合同防災訓練 見学 参加（防災ボランティア・負傷者）	・救急法のスキルアップ（ボランティア参加など） ・施設内の防災訓練参加 ・国内災害救護訓練 看護師参加	・国内災害救護訓練（看護師：トリアージやコーディネーションの学習）参加 ・国内災害救護活動参加 消防・警察/行政、地域ボランティア団体（町内会、学校など）、自衛隊との連携	・国内災害救護訓練（看護師長）参加 ・国内外災害救護・復興支援活動にメンバーとして参加 ・国際救援参加 緊急援助 紛争地；ERU，ICRC 自然災害；ERU，IFRC NGOとの連携 開発・二国間協力 UN，NGOとの連携	・国内災害救護訓練（看護師長）参加 ・国内外災害救護・復興支援活動のコーディネーターとして参加 ・国際救援参加 緊急援助 紛争地；ERU，ICRC 自然災害；ERU，IFRC NGOとの連携 開発・二国間協力 UN，NGOとの連携
	認定資格	・日本赤十字社救急法救急員　認定	・臨床経験3年で赤十字救護員として登録	・赤十字救護員として登録 ・赤十字救急法指導員の登録・更新	・赤十字救急法指導員の登録・更新	・赤十字救急法指導員の登録・更新
	その他			・日本赤十字九州国際看護大学大学院入学 ・2段階クリアし、3段階学習過程の場合、国際緊急援助ERUメンバーとして、また、開発事業のトレニーとして研修参加可能		・国際看護専門看護師（仮称）取得の方向で

入学時 → 1段階トライ → 卒業時 1段階認定 → 2段階トライ → 2段階認定 → 3段階トライ → 3段階認定 → 4段階トライ → 4段階認定 → 5段階トライ → 5段階認定

評価方法						
	知識	課題レポート提出「赤十字と国際活動」 各講義単位認定	課題レポート提出「国際活動と看護」 講義・研修受講後レポート提出	各研修参加後の報告書提出、報告会開催 講義・研修受講後レポート提出	各研修参加後の報告書提出、報告会開催 講義・研修受講後英文レポート提出	各研修参加後の報告書提出、報告会開催 講義・研修受講後英文レポート提出
	行動	訓練・研修参加	訓練・研修参加	訓練・研修参加	訓練・研修参加	訓練・研修参加

表4　赤十字看護師の看護実践能力の指標

項目	内容	I	II	III	IV	V
臨床実践能力	知識					
	判断					
	行為					
	行為の結果					
マネージメント	目標達成					
	社会人・職業人としての行動					
	医療チーム					
	医療安全					
教育・研究	自己教育					
	業務改善・研究					
	スタッフ教育					
	学生指導					
赤十字活動						

「看護師の実践能力の向上に関する検討会」報告書　赤十字医療施設のキャリア開発ラダー,日本赤十字社事業局看護部,2007年3月.83－88.

表5　赤十字看護師の国際活動実践能力の指標（案）

項目	内容（看護実践能力の指標をベースに、特化した国際活動要件）	国際 I ビギナー	国際 II コンピタンス	国際 III アドバンス	国際 IV エキスパート	国際 V コーディネータ
国際活動実践能力	特化した国際保健・看護知識					
	国際活動に特徴的判断力					
	特化した国際保健・看護行為					
	特化行為の結果					
マネジメント	マネジメント能力					
	コミュニケーション能力					
	教育力					
	セルフマネジメント					
研究能力	特化した国際研究					
赤十字活動	特化した赤十字国際活動					

2006/10/20 作成

表6　国際救援・開発協力事業にかかわる看護職のキャリア開発ラダー（案）　2007/02/09 現在

		国際看護　Ⅰ段階	国際看護　Ⅱ段階	国際看護　Ⅲ段階	国際看護　Ⅳ段階	国際看護　Ⅴ段階
目標		ビギナー 国際活動に必要な基礎的知識を身につける	コンピタント 国際活動に関する専門的知識を身につける	アドバンス 国際活動に参加しメンバーの役割が遂行できる	エキスパート 国際活動に参加しリーダーの役割が遂行できる	コーディネーター 国際活動の専門家としてリーダーシップがとれる
職務	看護実践レベル	赤十字看護実践能力Ⅰ段階 スタッフ（メンバーNS）	赤十字看護実践能力Ⅱ段階 スタッフ（メンバー・リーダーNS） プリセプターNS	赤十字看護実践能力Ⅲ段階 学生・スタッフ教育担当	赤十字看護実践能力Ⅳ段階 看護管理者	赤十字看護実践能力Ⅴ段階 看護管理者
	国際活動レベル	学生：海外研修参加	（特例　基礎教育で国際看護学を専攻、あるいは同等の教育を履修しビギナーを終了している看護師はERUメンバーとして参加） （学生の海外研修にボランティアで参加）	ERUメンバー 開発協力ビギナー Ward Nurse(ICRC) OT Nurse(ICRC)	ERUリーダー 開発協力アドバンスト 開発協力エキスパート Teaching Nuese(ICRC) Head Nurse(ICRC) Health Delegate(IFRC) FACTメンバー	ERUコーディネータ 開発協力コーディネーター Medical coordinator Project Manager
習得内容	専門能力	赤十字国際活動基礎能力 ・災害看護の基礎知識 ・急性期・母子看護基礎実践 ・ヘルスプロモーション知識 ・看護教育の知識	赤十字国際活動専門能力 ・災害看護専門知識 ・急性期・母子看護実践能力 ・ヘルスプロモーション活動実践 ・看護教育実践	赤十字国際活動マネジメント能力 赤十字国際活動実践能力 ERU・ICRC(戦傷外科看護実践) IFRC・二カ国間開発協力事業	赤十字国際活動マネジメント能力 プロジェクトチームの運営 PCM評価 ERUプロジェクト活動の企画 現地スタッフの人材育成 赤十字国際活動事業の研究的取り組み 他組織と良好な人間関係形成を促進 TOEIC　850以上	赤十字国際活動マネジメント能力 創造的な事業計画を企画し実践 赤十字国際活動に関する政策提言と研究指導 他機関と魅力的な人間関係形成を促進し、有効なパフォーマンスができる TOEIC　900以上
	マネジメント能力	メンバーシップ・リーダーシップを理解 目標管理の理解 問題解決思考がある 職場内の良好な人間関係 カウンセリングの基礎知識・技術 TOEIC　650以上	メンバーシップを発揮しリーダーの役割を理解 目標管理の理解と評価 問題解決に積極的な取り組み 他職種と良好な人間関係 カウンセリング技術の活用 TOEIC　730以上	プロジェクトチーム運営に協力 リーダーシップ、調整力・交渉力 看護スタッフ教育 現地スタッフの人材育成に参画 体験知を理論知 プロジェクトチームでの良好な人間関係を保つ TOEIC　750以上		
	研究能力	国際看護文献レビュー	国際看護文献レビュー	国際活動実践報告を発表 英文論文に取り組む	国際看護関連論文発表	国際看護関連論文発表
	国際赤十字	ボランティア活動に参加	国際赤十字活動を理解し、ネットワークづくりに関心をもつ	国際赤十字活動を理解し、ネットワークづくりができる	赤十字国際活動で関わった国とのネットワークづくりができる	国際保健に関わるさまざまな組織とのネットワークづくりができる
研修項目	赤十字国内演習・訓練	赤十字救急法 防災訓練参加	赤十字救急法指導 防災訓練参加 国内災害救護訓練参加	国内災害救護訓練参加	国内災害救護訓練企画・指導	国内救護訓練企画者の指導
	学習要件 卒後研修プログラムを作成	赤十字概論 災害看護学 国際人道法 国際看護学 異文化理解 コミュニケーションスキル	左記に加えて 国際保健学 看護教育 看護管理・マネジメント 疫学 感染症 スフィアプロジェクト	同左 戦傷外科	同左	同左
	研修内容	国　国内 学習要件を満たすための 院内・国内留学、関連研修会参加 心のケア研修	国　国内 学習要件を満たすための 院内・国内留学、関連研修会参加 心のケア研修 国際人道法セミナー 自己表現開発研修（NAP） PCM基礎研修 ERU基礎研修 BTC国内研修 3段階べ必修	国　国内 学習要件を満たすための 院内・国内留学、関連研修会参加 心のケア研修 国際人道法セミナー 熱帯医学研修（長崎） 国　国際 戦傷外科セミナー H.E.L.P. PCM評価研修 海外派遣研修 PHC（IFRC または JICA）	国　国際 学習要件を満たすための 関連研修会参加 ERUチームリーダ研修 戦傷外科セミナー H.E.L.P.研修コーディネータ PCMファシリテータ研修 FACT研修	国　国際 学習要件を満たすための 関連研修会参加
	研究関連	国際関連学会参加	国際関連学会参加 大学院進学	国際関連学会参加 大学院進学	国際関連学会参加 大学院進学	国際関連学会参加 大学院進学
資格要件		赤十字救急法認定 赤十字救護員登録	赤十字救急法指導員認定 赤十字救護員登録	赤十字救急法指導員認定 看護管理Ⅰ認定（必須）	看護管理Ⅱ認定（非必須）	国際看護専門看護師（仮称） 看護管理Ⅲ認定（非必須）
評価方法	自己評価 他者評価	課題レポート	課題レポート　面接	活動報告書　面接	活動報告書　面接	活動報告書　面接

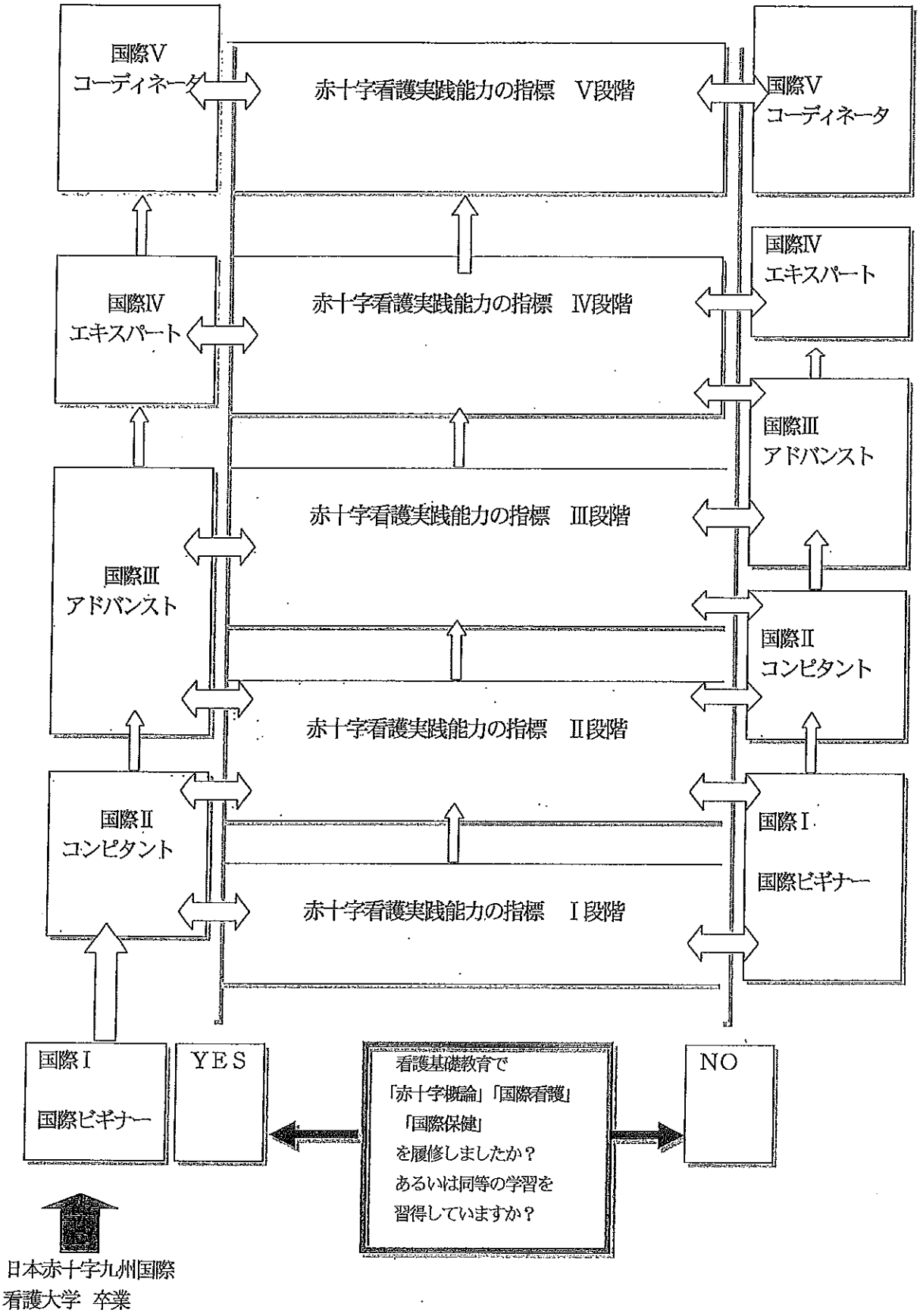

図1　国際活動キャリアアップ基礎教育別育成マップ（九州版）　2006/12/22 作成

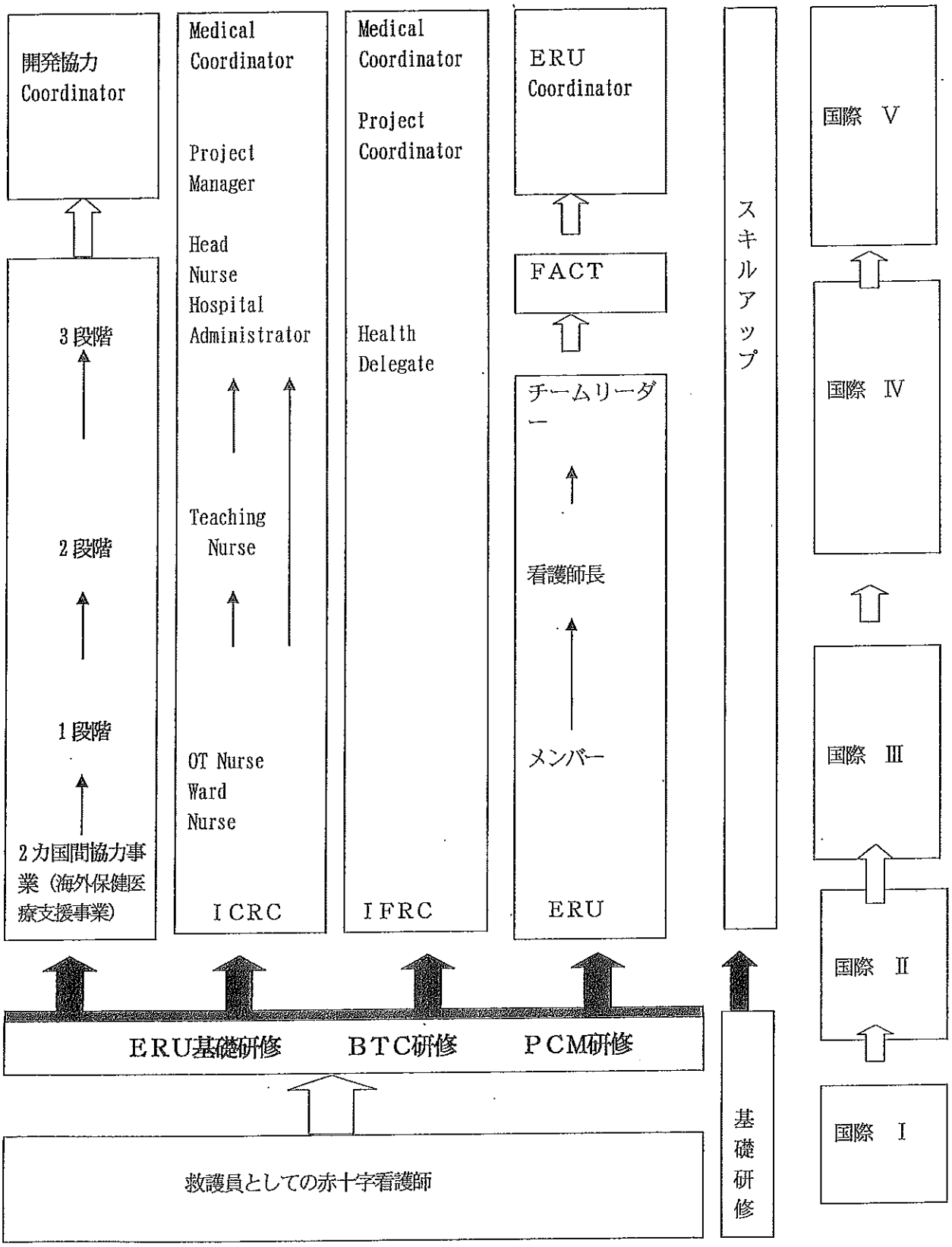

図2　赤十字国際看護活動コース別人材育成マップ（案）　　2006/12/22 作成